

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC 講演会報告 二〇一五年二月一四日

## 「キリスト教とイスラム教の対話」

講師 小原 克博氏 同志社大学神学部教授



近年日本の大学の「グローバル化」が急速に進む中で、明らかとなり、避けては通ることの出来ない課題が、多くの異なった文化的背景だけでなく、宗教的な背景の異なる人々と学びや研究活動を実施していくという「真の共生社会」の実現に向けての具体的な取り組みである。特に「キリスト教主義」という明確な宗教的理念のもとに創立された学校においてそうした状況の変化に対してどのように対応するかと言う「宗教リテラシー」の啓発と構築が本学でも喫緊の対応すべき現実として存在して

いる。今回、本学と同じ「キリスト教主義」を建学の理念としてつづ、CSMOR（一神教学際研究センター）を立ち上げ、三宗教間の対話の可能性を実践的に探って来られた同志社大学から、前センター長として責任を担ってこられた小原克博氏をお招きし、特にイスラムの現状を踏まえた上でキリスト教とイスラムの共生の可能性とまたそのことも含めた「真の共生社会」構築に向けての示唆をいただくためにご講演いただいた。

講演では最初に「宗教間対話」ということについて、欧米と日本の現状の違いについて言及された。その中で、キリスト教を土台として進んできた欧米が、その他の宗教、特にユダヤ教やイスラームをどのように理解し、共存するかということが日

常の中でも問われる大きな課題として検討され続けてきた問題であるのに対して、日本ではそこまで切実な問題として論議する必要にこれまで迫られてこなかった、ということが指摘された。また、キリスト教がこれまでの歴史の中で他の宗教に対して取ってきた態度として、他の宗教を認めない「排他主義」、他の宗教の中にある真理・救いの可能性を認めようとする「包括主義」があり、今日ではさらにそれを越えて、すべての宗教を平等に扱う「多元主義」が提唱されてきているが、未だ原理主義等を克服するに至らず、真の「宗教間対話」のあり方は今後重要な検討課題であることが示された。

続いてイスラームの現状が、その信徒数の現状と近い将来の予測を通して解説され、ムスリムとクリスチャンの人口が現在も増加しているが、その増加率はイスラームの方がはるかに上回っており、二〇七〇年にはムスリムの人口がクリスチャンを上回ると考えられていることが明示された。そして、現状でも世界の全人口の半数近くを占めるクリスチャンとムスリムがさらに増加し、現在以上に両宗教の源流となるユダヤ教を含めた宗教リテラシーが必要となることが語られた。

次に、ご自身の経験を踏まえてドイツ社会におけるムスリムの受容と「九・一一アメリカ同時多発テロ」以降のドイツ国内での両者の関係の変化、またCSMORでの取り組みの中で、タリバーンのスポークスマンを招いての講演と対話で明らかになった、決して一枚岩ではないその組織の実態等をご教示頂いたのち、約二年前から激増しているシリア難民とその対応をめぐってヨーロッパの世界が現在直面している問題について改めて言及された。

最後にキリスト教とイスラームの相違点としてイスラームが『クルアーン』を基にしたイス

ラム法（シャリーア）がその信仰生活ならびに社会生活全般をカバーしている点を挙げられ、西欧世界の「政教分離」的な発想がないことが示された。ただ、『クルアーン』に先行する正典を

有することからユダヤ教とキリスト教に対しては「啓典の民」として、特別な扱いがなされて

いる点にも触れられた。そして

ここまでの解説をふまえた上でこれからの新しい共生・共存のために、「宗教リテラシー」を越えた視点として、アマルティ

ア・セン氏の指摘を取り上げられ、人間が有する複数のアイデ

ンティティーといった現実をふまえないで宗教的な視点からの

みのアプローチが人間を矮小化してしまふ危険性があるとの示唆がなされた。

今回の講演を通して、単なる宗教間対話や宗教リテラシーの涵養を越えた、もう一步先の共生社会のあり方に思いを馳せながら、現在世界に起こっている様々な問題の解決を、特に基本的なリテ

ラシーを身に着けながらも、不断に「他者と共に生きる」ということの意味を探り続けることの必要性に改めて気づくこととなった。今回、ご多忙の中ご講演の芳

をおとり頂き貴重なご示唆を多く与えて頂いた小原氏に心よりの感謝をもって、本講演の報告を終えることとしたい。

（文責・舟木 讓）

## ■研究プロジェクト

### 「キリスト教主義教育の展開」

公開研究会「実験動物感謝式」：名古屋学院大学での実例から」報告

関西学院大学では理工学部および文学部において、各種実験・

実習に実験動物が用いられている。他大学においては、国立大学法人の医学部などでは慰霊行事や慰霊碑の設置が一般的にな

されており、また一部キリスト教大学においても慰霊行事が行

われている。関学ではこれまで、理工学部では慰霊行事等は行わ

れていない。また文学部では研究室の有志において行われてい

たと聞いている。この状況に対して、理工学部教員から学部と

して何らかの慰霊行事等を実施したいという要望が出されていた。

今後理工学部として、ある

いは関西学院大学としてどのように対応を考えていくべきかは、

実験実習に携わる学生や教員への配慮という点から重要な課題となると考えられる。

このような状況を踏まえ、既に他のキリスト教主義大学で行

われている実例を学ぶことを目的に、公開ワークショップとい

う形で研究会を開催した。動物実験感謝式の立ち上げから数年

の実施実績をもつ名古屋学院大学から、担当者の大宮有博さん

（当時：名古屋学院大学商学部准教授、現：関西学院大学法学部

教授）をお招きし、同大学で実際に

に行つて頂き、その後背景等の説明をいただいた。

二〇一六年二月一〇日（木）に開催した研究会は、関係者の多い神戸三田キャンパス第一会議室を主会場とし、西宮上ヶ原

キャンパス大学院一号館会議室を一サテライト会場として、遠隔会議の形で行った。主会場には、研究会メンバーに加えて、

実際に動物実験に携わっている学生・教職員も加わり約二〇名の出席があり、サテライト会場には研究会メンバー四名が出席して行われた。

第一部として、名古屋学院大学で昨行われた実験動物感謝

式が模範的に行われた。実際の式の流れはチャペル形式で行

われており、動物実験の概況報告ののち、前奏・讃美歌・聖書

朗読・祈祷・「いのち」に関わる絵本の朗読・学生からの感謝の

言葉・黙祷・讃美歌・後奏、という形であった。讃美歌等は出

席者が共に歌う形とし、祈祷は名古屋学院大学でつくりだされ

たものを共に読み上げる形とした。なお学生による感謝の言葉は内容説明のみとした。（なおこれを二〇一五年度の関学理工学部における暫定的な感謝式に替える形とした。）

第二部では、第一部で行われた内容の解説があった。名古屋学院大学での感謝礼拝の特徴として、（一）キリスト者教員とキリスト者ではない実験者が対等の関係で礼拝を運営してきたこと、（二）礼拝を学生と教員とで作り上げること、（三）聖書と、

他の物語（絵本等）を絡めること、（四）礼拝と講演を隔年で行うこと、が挙げられた。礼拝式の内容や聖書箇所、また祈りの文章等について、キリスト者・非キ

リスト者との意見交換を繰り返しい、毎年少しずつ新しいものにしてきたこと、仏教を中心

とした他宗教信徒の背景も大切にしながら内容を組み上げてきたことが述べられた。また学生の参与として、感謝の言葉を学

生が考え、読み上げるという工



夫がなされていた。聖書のみならず、「いのちを大切にする・いのちをいただく」といった観点から絵本や詩を読み上げること、幅広い視点を取り入れることを試みてこられた。さらに隔年で講演会を行い、牧師や生命倫理に携わる方々を学外から招いて動物実験の意味やいのちの意味を考える機会を得られるようにされていた。

またこの礼拝式の中で大切にされてきたこととして、以下が挙げられた。(一)礼拝の中で伝えたいのは「いのちの尊厳、いのちのつながりの中で私たちは生かされている」ということ、(二)いのちに関わることだから、どの宗教に属していても共感できること、(三)「キリスト教の

礼拝は語りすぎるから、観想を大切にしよう」という意見と、「この礼拝にはメッセージがない」という意見とのせめぎ合いを踏まえて内容を検討してきたこと、(四)情報の開示として、礼拝冒頭で実験動物の頭数を報告し、インターネットでも公開していること。関学と同じく、キリスト教主義大学でありつつも多様な宗教背景が学生・教職員に存在することを踏まえて丁寧な検討を続けてきたことが説明された。なお(四)については、関学でも同様にインターネット上の情報公開を行っている。

最後に大宮さんからは「どのような礼拝をつくりたいか」という問いが出され、関学としてふさわしい・望ましい感謝式のあり方を検討してもらいたいと呼びかけられた。

引き続き出席者で討議がなされた。その中で、大宮さんから絵本等の選定に苦労されていること、讃美歌等の選定にもキリスト者・非キリスト者両方の

意見を踏まえていることが述べられた。また研究会委員からは、讃美歌の選定や式そのもののキリスト教神学的な意味についての問いが出された。また出席学生からは、キリスト教式に偏り

### ■研究プロジェクト報告

#### 「キリスト教と現代思想」

研究代表者 柳澤 田実 神学部准教授

すぎることにへの違和感という意見も出された。なお今回の公開研究会を踏まえ、二〇一六年度から関学での感謝式の実施を検討している。

(文責・前川 裕)

二〇一五年度から始動した研究プロジェクト「キリスト教と現代思想」であるが、前回のニュースレターに間に合う時期に研究会を開催することができなかつたため、今回、二〇一五年度に開催された初回の研究会からご報告申し上げたい。まず二〇一六年一月一六日に、プロジェクト・メンバーの佐藤啓介氏(南山大学)に「二〇世紀における現代思想とキリスト教の布置を振り返る」というタイトルでご発表いただいた。タイトル通り、ポイントとなる文献や論文の紹介を軸に時系列的にお

話いただき、本プロジェクトの議論の土台となる思想的布置を明示していただいた。続く二月二日には、賀川記念館のメモリアル・ホールで現代美術家であり批評家でもある岡崎乾二郎氏(武蔵野美術大学)の講演会を開催した。この講演会では、プロテスタントの牧師を曾祖父、祖父にもつ岡崎氏が、キリスト教の実践と芸術制作との関係について、ブランカッチ礼拝堂のマスッチオによる壁画、建築家・白井晟一と賀川豊彦との関係、そしてファン・ルナやホセ・リサルといった一九世紀のフィ

リピンの画家たちにまで触れつつ、これまで氏が研究してきた内容をキリスト教という一つの筋で読み解くという充実した内容だった。

二〇一六年度の第一回目の研究会としては、二〇一六年六月四日に、プロジェクト・メンバーであり、本学神学部で組織神学を担当しておられる加納和寛氏に「現代神学における経論——ハンス・ウルス・フォン・バルタザールを中心に——」という主題でご発表いただいた。オイクノミア (oikonomia) という概念を歴史的に振り返った上で、この概念を巡る二〇世紀のプロテスタント神学とカトリック神学



岡崎乾二郎氏

の論争と対話を、バルトとバル  
 タザールという重要人物を中心  
 に再構成した極めて充実した研  
 究発表であった。聴衆も含めた  
 研究会の後の議論も大変に盛況  
 であった。

■研究プロジェクト報告

「日本における礼拝のインカルチュレーション」

研究代表者 中道 基夫 神学部教授

日本にプロテスタントのキリ  
 スト教が伝わって一五〇年が過  
 ぎました。一五〇年前に、キリ  
 スト教が欧米から全世界に広  
 まっていく中で、欧米のキリス  
 ト教文化や礼拝様式、教会建築  
 が伝えられ、それを忠実に真似  
 ることが非常に大切なこととし  
 て尊重されてきました。  
 そのおかげで日本のキリスト  
 教はある一定の水準にまで成長  
 したのですが、現代はキリスト  
 教を欧米文化の中に閉じ込めて  
 しまい、そこにキリスト教の純  
 粋性を見るのではなく、日本の  
 文化と結びついた独自のキリス  
 ト教文化の開花（インカルチュ  
 レーション）を積極的に評価し  
 ようとしています。  
 それはキリスト教と諸文化を

である神に対して「あなた」「爾」  
 と呼びかける直接的な関係性が、  
 少し距離感のある関係性へと変  
 化しています。

英語の「Lord's Prayer」こそキ  
 リスト教の本質を示しており、  
 日本語の「主の祈り」はその本  
 質を損なっているということも  
 言えます。また「御名」と訳し、  
 毎週そのように唱えることに  
 よって日本独特の神理解をもた  
 らしているかもしれません。

ただ、この訳にヨーロッパに  
 はなかった神理解の多様性が広  
 がっていると評価することもで  
 きます。本研究は、このような事  
 例を丁寧に分析し、積極的に、  
 かつ批判的に検証することを目  
 的としています。



関西学院大学キリスト教と文化研究  
 第17号 栗林輝夫教授追悼記念号

Celebration of Life

- ..... 山本 俊正
- 栗林輝夫先生を偲んで
- ..... 樋口 進
- 「栗林輝夫先生を偲ぶ会」
- 第一部 座談会
- ..... 辻 学、岩野 祐介
- 大宮 有博、西原 廉太

- キリスト教と文化は衝突したか
- RCC の歩みを振り返って
- ..... 辻 学

- 【論文】
- 神の言葉を聞いて行う
- ルカ 8・4—21 の釈義的考察
- ..... 嶺重 淑
- ペトロの召命
- ヨハネ福音書伝承の検討
- ..... 前川 裕

- 現代神学における経緯論
- ハンス・ウルス・フォン・
- バルタザールを中心に
- ..... 加納 和寛
- Ene Marie Thomsen: Her Missionary
- Years in Japan 1955-1966
- ..... Christian Morimoto Hermansen
- Y M C A 「カンパラ原則」の
- 宣教論の意味
- ..... 中道 基夫

【研究ノート】

- トラウマ理解と平和構築
- 東アジアにおける歴史的トラ
- ウマの克服
- ..... Jeffrey Mensendiek

- 【二〇一五年度研究プロジェクト報告】
- 東アジアの平和と多元的な宗教・
- NGO・市民社会の役割
- ..... 山本 俊正

- キリスト教と現代思想／現代哲
- 学「エコノミー／オイコノミア」
- 概念をめぐって
- ..... 柳澤 田実

- 日本における礼拝のインカル
- チュレーション
- ..... 中道 基夫
- キリスト教主義教育の展開
- キリスト教主義学校における
- 宗教リテラシーのあり方をめ
- ぐって
- ..... 舟木 讓
- 二〇一五年度 キリスト教と文
- 化研究センター活動記録

編集後記



今号は関学も関わる多様な状況  
 をご紹介できたと願う。(M)